新編水滸畫傳

四編

六

875
36

門へ遠21
號875
巻36

# 新編水滸畫傳卷之三拾六

東武　高井蘭山翁　譯編

明治三十六年十月十日講求

○潯陽樓にて宋江反詩を吟ぜ

琵琶亭にて李逵女性と彈倒れ酒樓の主人に駡き怒る家僕ふ命じ女ゞ口中に水を灌ぎ藥を含せ漸甦れば扶け起し乞に面乃上大ふ傷ひ破れそう。女ゞ父母ハ原女ゞ為に事を動さんと欲れ共女と打そう者ハ黒旋風李逵あること聞れば先自ら大ひふ怕きあて一言の是非とも云ゞ只手巾を把て女ゞ頭を包ゝ父母同じく女と痛りそう。宋江此躰を見て先女ゞ母を呼で問そう。汝ゞ夫の姓いかん彼老母ゞ云我ゞ輩姓ハ宋ゝ。原京師の者ゝ女ゞ名ハ玉蓮とや曲を知て唱ふよう。乃ち這琵琶亭に在て客の為に曲を唱ひ僅の助けを

求親子三人これと過活るに女本短氣者あるゆへ客の勢ひと顧ず〜〜
一向曲と唱ひ反て貴客の怒りと惹出し。自ら苦るを取ぬ我輩貴客と怨
るとあらば宋江彼が辭の老實あると聞。尚且同姓〜〜ると感じ。又
老母ふ對して汝且〜〜人と我に跟て營中ふ遣せ。我汝ふ二十両の銀
と與へ女が醫療錢ふ當しむべし。夫婦の者是と聞て忙〜〜拜謝し
て云ける。我輩豈敢て多くの銀と望んや。若三五両の銀と得あば。是
十分の福ひあらん宋江が云我が一言汝らと誑〜〜とあ〜〜。汝宋老若
自ら我ふ隨ひ營中ふ來らば我速ふ二十両の銀と汝ふ與ふべし。宋老
夫婦いよ〜〜拜謝して云貴客若肯て二十両の銀と惠まゝひて我が
輩と救ひあらば恩ハ天地と等ふして親子三人身と没るまゝ忘れと
忘るまじ。此時戴宗は大ふ李逵と恨〜〜云ける。汝又人と打傷ひ來

長兄ふ多くの銀と費さしめ尚白々として悔ざるハ甚だ以て道理なし。李
逵が云我ら唯指頭と以て女が面と彈きける。彼自ら倒まぬ我いま
だ此のごとく儒弱なる女と見ざ。汝親子若猶ほ惜と憤らば我面と三百
拳打て恨と雪げ。宋江等これと聞て衆皆一咲と催して酒亭ふ
上下。事と表さば淋べきと悅び入ける。張順自ら酒保と呼で。今日の席
ハ我則ち東人なり。酒錢ハ我是と償ふべきぞ。宋江是と聞く。我賢弟等と
引く酒と勸めいらんぞ此席の主と張賢弟ふ讓んや。尤禮ふ於て不可し。
張順再應席主〜〜と求め〜〜云ける。宋張兄山東の地ふ居る時
〜〜ふも。我が兄弟兩人何とぞ鄆城縣ふ趣て。長兄と訪ひ奉らんことを願ひ
〜〜ふ今日天幸と賜つて。押司の尊顏と拜し。手と一亭に握る。いらんぞ
一點の款待と盡さぐらん今日ハ某先席主とつとめ聊尊敬の誠と表すべし

戴宗ガ云。公明長兄すでにかたく某ガ言と関ヲ張賢弟既ニ尊敬の心と表さんと欲して。再三席主とあさんと望むニ今日ハ先席主と張賢弟ニ譲る。其心の信と全かたくもつて宋公明ガ云今日の席主原来某ガ當然あるべき共。院長かたく諫めるニ上ハ某豈敢て教に違んや。他日ニ某酒宴を設け。今日の席を還すべし。張順大ニ悦び乃ち両尾の鯉魚を携へて。戴宗李逵並ニ宋老と倶ニ宋江ニ隨つて。琵琶亭を下り。遂ニ營中ニ至て抄夏房ニ入りて。宋江取敢ず先両錠二十両の銀を。宋老ニ與へるニ宋老ハ大ニ歡び地ニ伏び再三拜謝して宿所ニ回るなり。此時天色既ニ晩る。張順彼両尾の魚を。宋江ニ送て別を告て。宋江頓て張横ガ書簡を取出して。張順ニ與へられば是を請取直ニ別を。出去り戴宗李逵も城下ニ立帰る。宋江ハ両尾の鯉魚を得て一尾ハ管營へ送り。一尾ハ自ら賞翫せて其味甚ガ美あるニ依て多く用ひ。一處其夜四更の時に至て腹頻りニ痛く。暁まで凡二十度ばかり瀉て。只昏々として床の上ニ臥て。ろろガ宋江ガ人とあり。常によく人を敬ひ交るを。ハヤ。營中の流人ども都て宋江を訪ひ。湯を沸て粥を煮。或ハ手を按り足を拈り。殊更懇ニ看病をなせり。翌日張順又両尾の鯉魚を携へ宋江を候ひろる處ニ宋江ハ諸の流人ども。ニ看病せて。床の上ニ打臥て在られば張順ハ是を見て大ニ驚き。急に醫師を請て療治を加へんと欲する所ニ宋江ガ云我昨日多く魚肉を食て。腹を壊ひ。くるしむと苦て。別ニ重病ニあらざるべ。唯瀉を過るの藥六和湯を求て。これを服さば忽ち瀉も止り痛も住るべし。張順ガ云某今日も。両尾の鯉魚を携へて。こゝ。宜くこれを乗べし。宋江ガ云既に両尾の鯉魚を携へふと

琵琶亭上ホ
老父母女子
玉蓮ガ歩傷を
及抱ヒ
新編水滸畫傳卷之廿六
新編水滸畫傳卷之廿六

あらば。足下我ゞ為ふ是を管営と差撥とふ分ち送りるへ張順其言ふ應じ。乃ち鯉魚を把て管営と差撥とふ送り。直に馳て六和湯を求め再び営中ふ回り。宋江ふ用ひしを。其日ハ張順暫く看病して遂ふ私宅ふ帰りそう。翌日戴宗李逵両人多く酒食餚果を携へ宋江を尋して。病いまゞ快からざるゆゑ床の上ふ臥して。酒肉をも用ひざるとゝ戴宗李逵大ふ憂へ其日ハ終日看病して。黄昏に回りそう。宋江ハ営中ふ在て。五七日六和湯を用ひ。處ふ病全く痊て快く覺へられば城下ふ馳て戴宗を訪んと欲しそまゝども此日ハ若戴宗ゞ来るとてやあらんと心ふ待そまゝども。終ふ見へざりしゝ。次の日宋江朝飯後若干の銀を懐ふし。城下ふ至り其邊の人ふ戴宗ゞ住所を問そうふ戴院長ゝいまゞ妻子もあく獨身あるゆゑ城隍廟の間壁ある。観音庵を借て住るゝ。宋江ゝに於て直ふ観音庵ふ尋往るへ宋江ゝに於て直ふ観音庵ふ尋往そうふ。ちや他行せ。躰ふ。庵門閉。あるゆゑ宋江立去て李逵ゞ家を尋そうる處一個の人有て告て云黒旋風ハ未ゞ安身を定ゞ。東方ふ両日住。又西方ふ両日歇。偏ふ雲旋のゞく。其止る處ふ定ゞ宋江又張順ゞ宅を問そうふ。是ハ原来城外の村中ふ住。城下ふ来るを極て罕あり。宋江是を聞て大ふ悦び。再び城外ふ出て。張順ゞ家を尋そうまゞども。容易尋遇ゞ。自ら辭々そうして。數十歩そうる繞り出る。江中の風景を見るに誠ふ類ひ少き佳觀へ宋江そゞに一軒の酒樓ふ過て酒旆を仰ぎそうふ。酒旆の上に潯陽江正庫雕と云ハッの文字あり又簷の外ふ掛そうる額ふハ蘇東坡ゞ書そうる。潯陽樓といふ。三ッの大文字あり。宋江此額を見て思ひそうるハ我昔日鄆城縣ふ在て時江州ふ

潯陽樓と云名所有と聞るゝ果〳〵て此處ゝありるよゝ。我いうんぞ空〳〵とゝ過んや。宜〳〵樓ゝ上て風景をも一見せざやとて。杖を別へ至て門の上とうるゝ又両面の額あり。五の大字有て世間無比酒と書り。又一面の額ゝハ天下有名樓と云五文字。宋江已ゝ樓ゝ上り座を求め。獨自ら欄杆ゝ倚〳〵。目を縱ゝ〳〵此處をとうるゝ。真によゝ九一座の酒樓あり。雕簷日に映〳〵。畫棟雲ゝ飛。欄杆低く〳〵て軒窓と接へ簾幙高く戶牖ゝ懸り。吹笙品笛總て座毎ゝ設け。其美麗あること。言語に盡すべからゝ。宋江良久〳〵此景を見て。讀嘆轉頻りに。時ゝ一人の酒保樓上ゝ來て簾を下し。乃ち宋公ゝ對〳〵て云るハ官人ハ別に客を待ゝふや又獨自ら酒を酌ゝふや。宋江口ゝ信せ〳〵答るハ。我猶両人の客を待ゝ。いまゝこゝに。汝先一樽の美酒と。幾ゝ〳〵の佳肴を携へ來る酒保謹で言を領し。遂に樓を下り〳〵。未ゝ暫くもせざるゝ。ちや一樽の美酒と六盤の佳肴とを拿て。再び樓ゝ上り〳〵べ。宋江こゝを見て心中想道此のごとき美麗ある肴饌器皿他の及ゝ所ゝあらず。誠ゝ富貴の江州ゝ。我罪を犯〳〵て此處ゝ至り。かゝのごとき真山真水を看て浮生を慰まゝ。もること亦宜あらゝや。我故郷ゝも幾ゝ〳〵名山古跡有ゝいへども。曾てかゝまでの風景に如ざるこゝを。樂まずんば有べからゝ。只獨欄杆ゝ靠〳〵一盃を乾し。両盞を酌。覺へず爛醉ゝ及び。猛然と〳〵心中想ひるゝ我山東ゝ生を。鄆城ゝ長じ。天下の豪傑と交を結んで一の虛名を世に振ふといへども。今己に三十餘歲ゝ至て。いまゝ功成名遂ざ。剌へ罪を蒙て此所ゝ流され。我故郷の老父舍弟ゝも。再び面を對せざ。斯參商の憂ゝ逼ること。是何の應報なるぞやとて。潸然と〳〵て淚

と流し風に臨み目に觸れ恨を感じ懐を傷ませ忽ち一篇の西江月の詞を作て酒保に筆墨を借頻に身を起し粉壁の上にとるに己に多く先輩の題詠あり名れば宋江暗に想ふらく我も亦宜しく此壁の上に書べし若他日身営へに再び此處を過らば重ねて此樓に上らん我が此

一篇の文字を看今日の艱難を思ひ出すべしとて自ら酒興に乗じ即ち粉壁の上に筆を揮ひ其詞を書して云

自幼曾攻經史長生亦有權謀恰如猛虎臥荒丘
潛伏爪牙忍受不幸刺文雙頰那堪配在江州
他年若得報寃仇血染潯陽江口

宋江書罷て大に悅び大に笑ひ又數盃の酒を酌ぐ醉益発し手を舞足を踏で再び又筆を拳て唱へ四句の詩を吟じ壁の上に寫していはく

心在山東身在吳
他時若遂凌雲志
敢笑黃巢不丈夫

宋江已に詩を書了て又其傍に軍城の宋江作と五つの大文字を書即ち筆を擲て又自ら良久しく歌ひ再び數盃の酒を飲んで覺へず酩酊爛醉し酒力に勝ずして遂に自ら袖を拂て樓を下り偏に浪々滄々として忙々営中に回り乃ち房門を開く床の上に打卧し直ちに五更の時に至て酒醒ずに昨日潯陽樓に在て詩を吟じ壁に書を覚へざりしかば又江州の岸に對して魚為軍と云所あり此所に黃文炳と云て昔日通判の職を做し者在り經書を讀んで巧言令色の輩なり心大きに容し原來賢を嫉み能を妬み己に勝る者は是を害し己に知ざる者を弄し

飄蓬江海謾嗟吁
取笑黃巢不丈夫

專ら郷里ふ在く人と傷ふ此黄文炳うつく江州の蔡九知府ハ當朝の蔡太師ゞ男くると聞毎度江を渡て知府と訪ひいうふめくく蔡九ゞ擡挙と被り。再び官とおさんと欲くぬ。此日這黄文炳両人の家僕ふ多く新果等の禮物と持せ。乃ち一艘の快舟に乗て江を渡り。直ちに府裡ふ馳て蔡九知府と訪ひくる處ふ此日府裡ふハ遠來の珍客在く。酒宴と設け殊さく忙さく見へくるゞ黄文炳敢て知府ふ見へゞ再び舟と回くて潯陽樓の下に至り。暫く喘氣と避んと舟と下り。直ちふ潯陽樓ふ登り。自ら欄杆ふ倚て左右の壁の上とうるに許多題詠ありうれば。即ち身と起くて壁の邊ふ近々と來り。一々これと讀く。遂ふ宋江ゞ題くる西江月の詞や並ふ四句の詩と看て忽ち大ふ驚ひく云。這詩ハ何者ゞ書くるふや正く謀反の心と含くる反詩ありくて頻く酒保と呼で問くるハ。此両篇の詩詞と作りくる者ハ誰あるぞや酒保ゞ云昨日一個の人來く。只獨一瓶の酒と飲。醉後ふ此詩と吟じ。壁の上に書ぬ黄文炳ゞ云凡何等様の者ありくぞ。酒保ゞいく面上ふ両つの金印有くうゞ。多くハ營中の者ありゞ。黄文炳ゞ云。必ず此両篇の詩詞と。刮無きるとあくまとく。自ら一紙と出くてこれと寫く取。遂ふ樓と下て船ふ乗。其日ハ宿所ふ回りうう。翌日又両人の家僕と從へく。知府ゞ家ふ至うくまゞ。知府先人と出くて黄文炳と後堂に邀ハくふ。小則知府も又自ら後堂ふ出く黄文炳に對面く。閑談已ふ罷りぬる處ふ黄文炳知府ふ問て云くるハ。まくず尊父太師の方より。近日使者到來くくるやいなや。知府ゞ云前日書簡到來くぬ黄文炳又

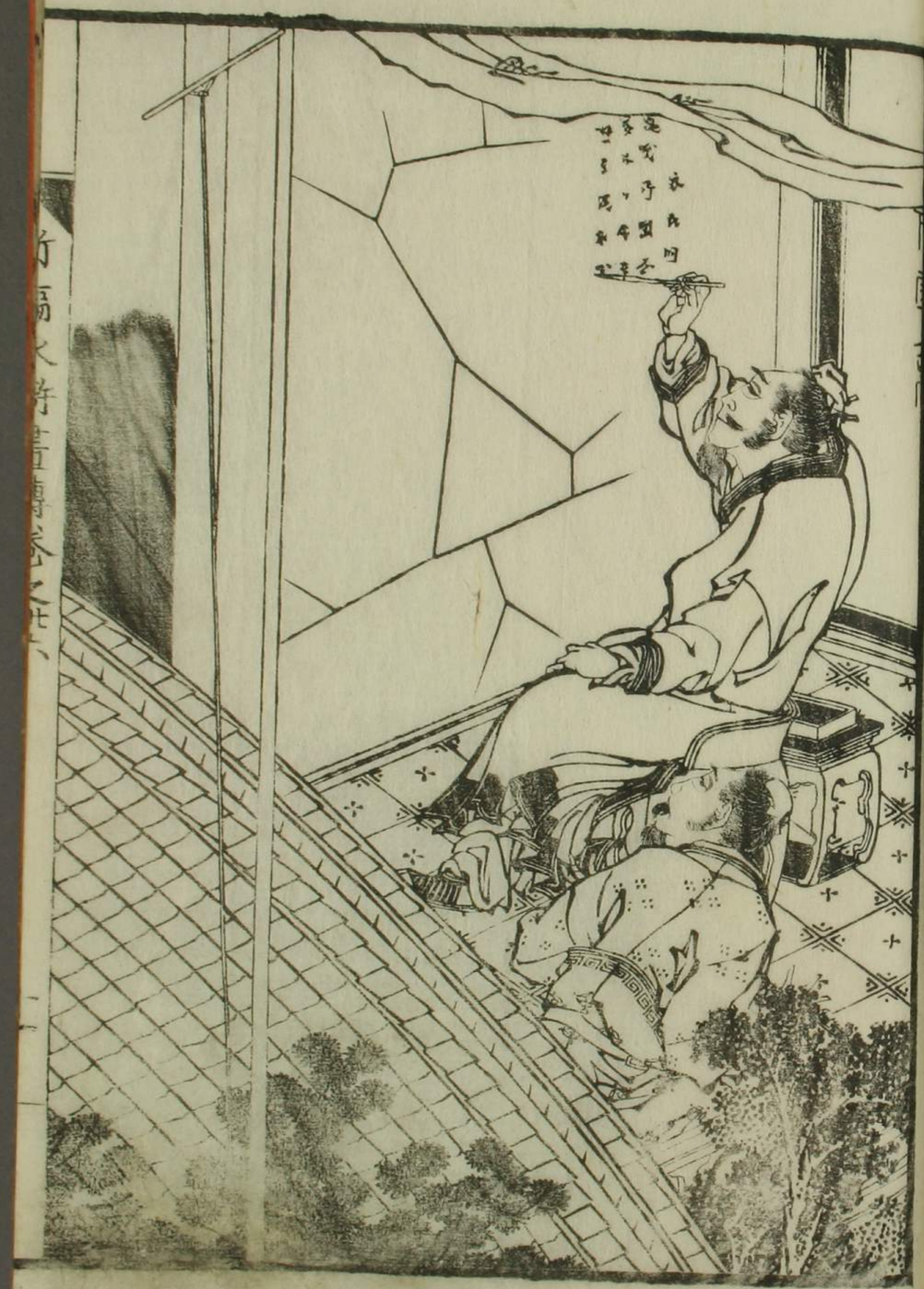
問て云。頃日京ゟハ別に新〳〵き吏もあらざるや。知府ゞ云。近來京に頗る新〳〵きと有て騷動と催に。這回家父太師ゞ晋中に。此事戍示〳〵て云。頃日大史院司天監奏聞〳〵て云ゆう。夜天象をとるゟ。岡星照〳〵く呉楚の分野の地に臨む。敢て乱をなに者あらんとて。我が這江劦の地ハ別〳〵て牢く守るべきとの吏あり。殊更小兒等ゞ四句の語と謠て云

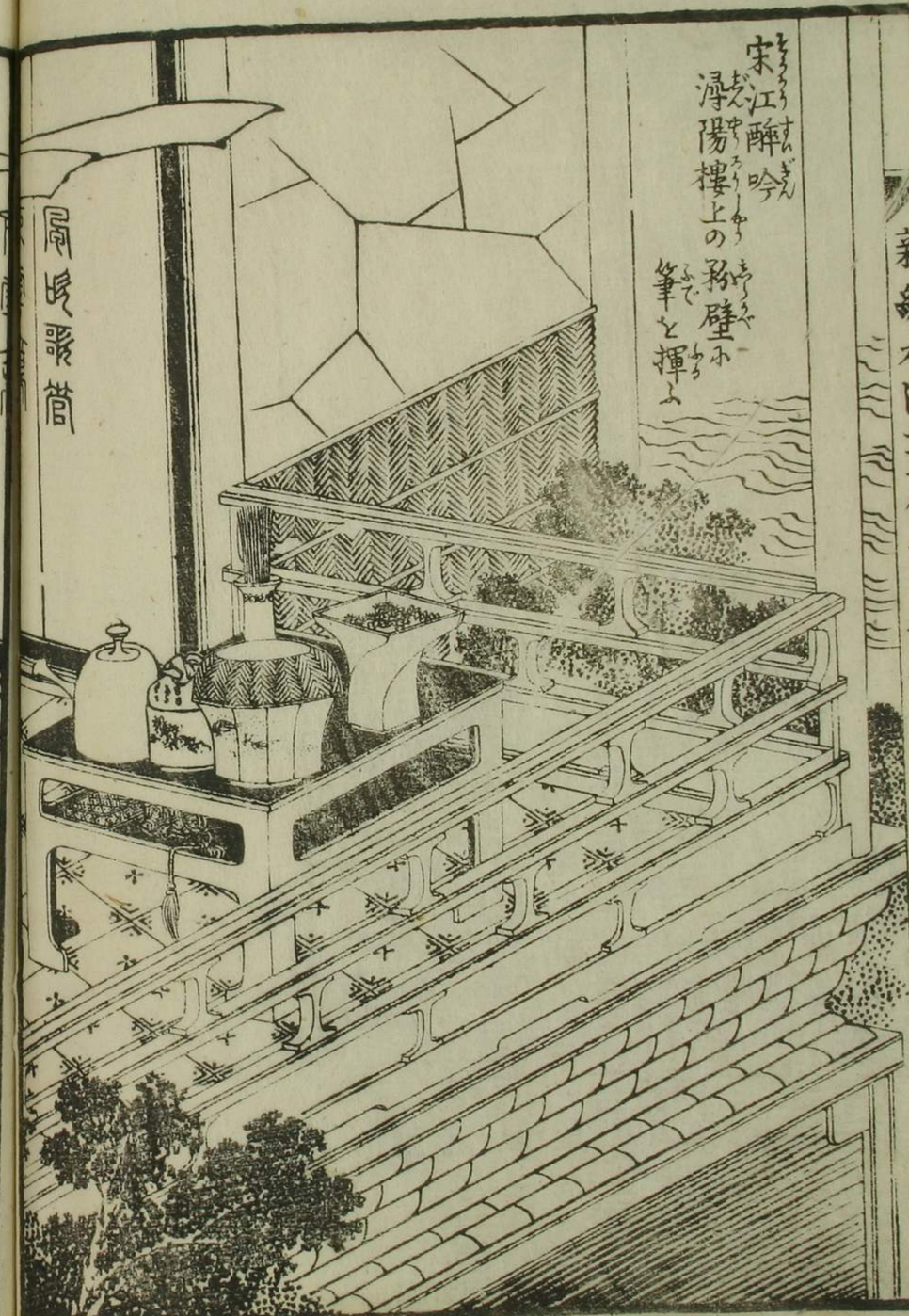
耗國因家未　刀兵點水工　縱横三十六　播乱在山東

今都ゟハ六〳〵の恠吏有て。文武百官評議區々あり。此ゟ父太師急ゟ書簡と下〳〵て我此江劦の地と。就中嚴に守ら〳〵む。あに奇異ならにあ〳〵ずや。黄文炳ゟ書と閲良久〳〵沈吟〳〵て在〳〵ゞ。忽ち打笑て云。此吏良ゆゑあり。相公此詩と見て自ら曉〳〵て。彼壁ゟ書る詩の抄と取出〳〵て。知府に呈〳〵れば大ゟ驚て云是真に謀反の意と含〳〵反詩あり。汝此詩と何里の處ゟ〳〵得〳〵〳〵。黄文炳ゞいゑ〳〵。某昨日も已に相公と訪ひ奉り〳〵共相公ハ自ら珍客と欵待ゆひて。貴閑ゟ〳〵よ〳〵兼〳〵ゆゑ。敢て尊顔と拜せず再び江邊ゟ至〳〵直ゟ回らんとせ〳〵處に。暑氣甚ゞ人と蒸〳〵て勝がゝうゆゑゟよう。暫〳〵潯陽樓ゟ登て。熱暑と避壁に書〳〵前人ゟ吟詠あゞと見て。自らも詩真と催せ〳〵處にあらに又新題の詩詞あると看ゝゟ乃ち此反詩ゟ〳〵ゆゑゟ早速これと抄〳〵て尊覧ゟ呈〳〵奉る。知府ゞ云。ゟ〳〵此詩ハ何等の者ゞ書ゝるや。黄文炳ゞ云相公其姓名と見ゟ人明らゟに鄆城宋江作と云五字あり。知府ゞ云此宋江と云ハ何者ゟ〳〵んや。黄文炳ゞ云彼自ら分明ゟ書ゝ。不幸ゟ〳〵

て文と雙頰ふ刺と云くれば必定今當地ふ流さるゝ。營中ふ入ぬる配軍
ふくぞ有べし。知府ゞ云若果〳〵て。配軍ゞ所為あらば何の大事うあらん。
決して憂ふ〳〵べ。黄文炳ゞ云相公必ずとあるを輕く見るふてこのうを。
京の小兒等ゞ謠ふ四句の恠言ハ正に此配軍ゞ身の上に應ぜり。知府
ゞ云汝何を以くとあるを知れゝや。黄文炳ゞ云。耗國因家木と云を
以く某熟これを思ふふ國家の錢糧を耗散するの徒ハ必定家頭
ふ木の字を著べし。然らば是則ち宋の字く第二句に刀兵點水工ふく
云を以くとあるを思ふに。刀兵を興起するの徒ハ必定水邊に工の字を
著べし。然らば明らに是江の字ゝ此反詩を書くる配軍ハ姓ハ宋名ハ
江と号ゝ此宋江都の謠言ふ應じて。反詩を書ぬることゝ天數ゝ若急ふ
彼を除きるふ〳〵べ。民の福何ぞ是ふあらん。知府又問て云縱横三十六

播乱在山東と云ハ何等の意ぞや。黄文炳答て云。縱横三十六と云ハ
或ハ六六の年。或ハ是六六の數あり。播乱在山東と云ハ今鄆城縣
ハ是山東の地あり。此四句都て反詩の作者宋江ふ應ぜり。知府ゞ云此
反詩ハ何時の時書ぬるや。且此宋江尚當地ふ在やらん未ゞ分明ふ知べ
〳〵べ。黄文炳ゞ云某昨日彼酒保に問るに。彼答て前日來りて酒
後ふられを書〳〵と告ぬ若宋江を捉へんと欲るゞ。營中の文冊と
査るゝ早速實否知るひとん。知府ゞ云汝ゞ高見極く明らあり。宜く
文冊を査べ〳〵。頓く左右ふ命じて。營中の文冊を取出させく
されとゝるふ。今五月の冊ふ於く。新配の流人等ゞ名を寫〳〵る内
に果〳〵鄆城縣の宋江と云者あるれば。黄文炳大に驚き。是則ち
謠言ふ應ぜ〳〵者あり。小事に同じゝるべ。ゝるを早く捕へしめ




宋江醉吟
潯陽樓上の粉壁に
筆を揮ふ

万一事延引に及んでハ風聲洩彼必定連夜に逃失後悔〳〵て益あるまじ。知府これを聞て其議に同じ。其日両院の押牢節級戴宗と呼ぐ命じ給ふ汝急に軍卒等を引て営中に馳彼潯陽樓に〳〵友詩と吟じ〳〵る罪人鄆城縣の宋江と云者を捉へ来る必時刻を差へ。自ら誤つことあるを戴宗命を奉。心中大に驚き。終に廳前を退出て役所に至り。頻て軍卒等を催し〳〵先約を定めるハ没羽箭人各器械を持て我が宿所彼城隍廟の間壁なり。観音庵に會合せよ。必時を過つべからずと命じ。且衆皆私宅へ帰りなれば。此時戴宗ハ自ら仙術神行の法を施して暫時の間に先営中に至り。直に抄房に入〳〵宋江を見て獨安々と心よ〳〵床の上に打卧て在るを戴宗が来〳〵と見て忙〳〵相迎へ云ふハ。我前日城下に至り院長と問〳〵ふも院長早他出有て庵門閉〳〵ふぞ。獨自ら潯陽樓に上り一瓶の酒を酌覚へず大醉に及び。此両日ハ悉々〳〵て快〳〵。今日も猶打卧あるを戴宗が云其日長兄彼樓上の粉壁に何等の言語を書ひしやと宋江が云醉後の乱言なれ共全く忘れ畢ぬ戴宗低言て云ふハ今蔡九知府某を廳前に呼て命じ給ふハ汝等くの軍卒を領し営中に馳反詩を吟じ〳〵る罪人鄆城縣の宋江を捕へ来るべしと命を奉ぬ此故に某是を知て大に驚き先諸の軍卒等を我宿所に待〳〵ふ我今預〳〵ハ来る。此〳〵と長兄に報ぬ唯志らずいろある計を以て能長兄を救ちんや宋江是を聞大に驚て云己に〳〵かくのごとくに我命必ず脱まじ〳〵。終に江州に於て自ら死を致さんと去とてハ無運あるとて天を仰き歎息して止ざるを戴宗良久〳〵黙然として在るが。

忽ち計を思ひ出し。宋江に對して云ふは。其今長兄に一の計を施さゝれ
進せん。我は先回て少剋軍卒等を引て再び來るべき間。長兄は宜しく頭
髮を乱し。面上に泥を塗。詐て狂人の躰をして。地上に打倒れ二向胡
言乱語を呼で狂ひまへ。然らば我又回て狂人のよしと知府に訴ふべし。宋江
是を謝して云。兎も角も賢弟の教へに順ふべき間。望らくは賢弟いよ〳〵我
為に力を竭しまへ。戴宗が云。某豈敢て疎畧あらんやとて。遂に宋江に別を城
中に回り。観音庵に至り。諸の軍卒等を引て。再び営中に來る。則高聲に呼
もう問ひ。新來の流人宋江と云者はつゞまる在や。牌頭官が云。宋江は今已
に抄事房にあり。宜しく某に從て來りまへとて。戴宗並に諸軍を引て抄事
房に至りぬる處に。宋江は頭髮を振乱し。面上に泥を塗り。額胡言乱語を
して呼り。狂ひ地上に倒れ。則ち戴宗並に軍卒等を見て罵りぬる。汝ら何



奴あるべ。我が王殿に入や。戴宗故意大に怒り。即軍卒等に命じて宋江を
捉へしめんとせし處に。宋江眼を睜開き乱に打てかゝり。再三罵て云ふは。我
は是玉皇大帝の女婿なり。大人今十万の天兵を我に與へ。汝が這江劫
を攻しめんが。乃ち閻羅大王を先鋒とし。五道將軍を後陣に備へ。我を
是太元帥として。一の金印を授さしめ。其重さは八百餘斤あり。汝ら此
旗を掩て降参せずんば。只一鼓に生捉んと。四面八方に跑て狂ひ走るべ。
諸の軍卒此光景を見て云ふは。此者原狂人なり。これを捉へ何の用
うあらん。戴宗が云。誠に汝が云所其理あり。先回りて知府相公に此光景を
訴へ。若弥彼を捉へずんとあらば。再び來て捉へべしとて。遂に衆人空しく
城中へ歸りぬる。此時蔡九知府は廳上に出て專ら消息を待居ける
處に。戴宗頓て軍卒らと共に廳前に至て訴へぬる。彼宋江と云者

へ原狂人みて頭髪を乱し〳〵向上と泥み。只顧乱言と呼つゝ地上ゑ
狂ひ倒れ一點も正氣なきあり。られまつゝ某等先これを捕へず〳〵と
馳回りぬと口を揃へゆゝる

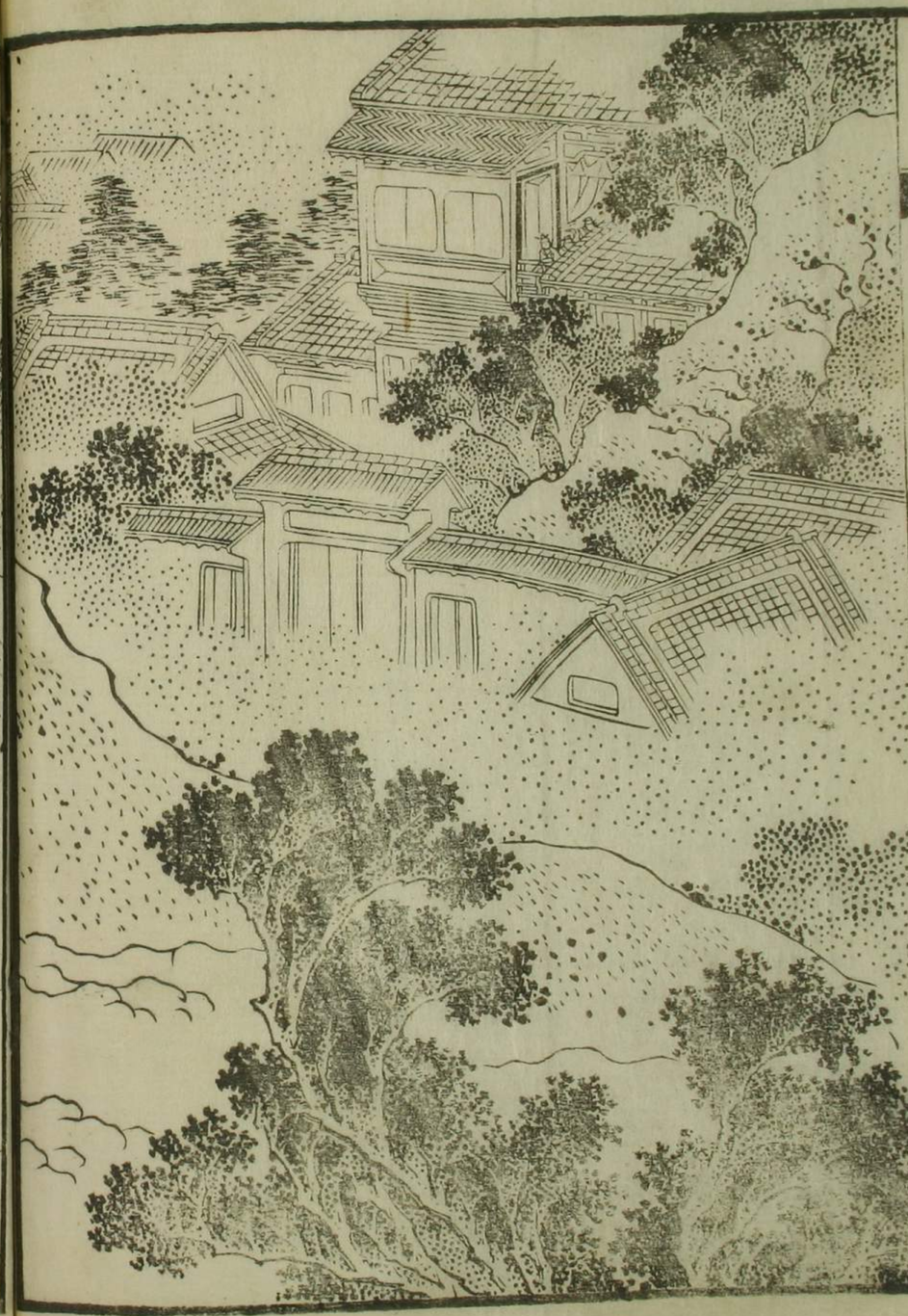
○梁山泊戴宗ゑ假信を傳しむ

蔡九知府尚縁故を問ちんとせ〳〵處ゑ彼黄文炳屏風の背後ゆゝ
く出云ゝるゝ相公必ず此言を信じまふとあらば。宋江が壁ゑ書〳〵る詩
詞の筆跡決〳〵て狂人のあに所ゑあらず。恐らくハ狂人と云ゑは詐あり
ん先速にあとを捉て試みゆゝ知府ゑ云汝ゑ言大ゑ可ありとて又戴
宗に命じゆゝハ汝衆人善悪と論ぜば。彼罪人宋江と捉へ來る。我專
汝が音信を待ん。戴宗命を受大ひゑ苦〳〵再び軍卒らを引て營中
に至り。戴宗則人目を誑き暗ゑ宋江ゑ對〳〵て云ゝるゝ黄文炳知府の影
身に添く妨るゑ計調らぬ。再び命とうけ〳〵來きり。長兄先一旦擒
とあつく州里へ至りゆゝ重て良計を有べ〳〵て宋江を捉へ囚車に入
則軍卒等にられを擡せく直ゑ江州府裡に至り〳〵べ。知府遂ゑ宋江を
堦の下に引せきをきりに宋江知府を瞧く大ゑ罵り呼て云ゝるゝハ汝
へ何者あるべ。我を捉へ〳〵ぞ。我ハ是玉皇大帝の壻〳〵て。此度十万の天
兵を掌て大元帥とあり。乃ち閻羅大王を前軍に備へ五道將軍を後
陣ゑ備へ急に汝を活捕て江州城を燔焼せんと欲き。我が丈夫玉皇
大帝。我ゑ賜つゝる金印重き八百餘力あり。汝ら若早く災を避去ざん
べ。久立地ゑ至るべ〳〵。蔡九知府られを聞只呆きる處ゑ黄文炳又知府ゑ
對〳〵て云ゝるゝ相公速に彼營中の差撥。あらびゑ牌頭等を呼寄るひく。
此者初く來り〳〵より。此のごとき狂人みく〳〵あり〳〵や。又頃日ようの狂

人あるや。具くあるを問へ。若初めよりの狂人ゝ〳〵あらば。是則真あり。若
頃日よりの狂人ゝ〳〵是則詐あり。知府ゞ云汝ゞ言大ふ當まりと
て。則ち人を馳て。管營差撥あらびに牌頭らを呼ぐ。宋江ゞ狂人
の起りを問へ。管營差撥敢て偽らず。只直言を以て訪へる。此
者初て來りし時は狂人ふあらゞ定て頃日よりの狂人ふあり〳〵なるべ。
知府此言を聞て大ふ怒り。忽ち左右に命じ。宋江を掴り倒さしめ。
一連に痛く五十棒打せ〳〵べ。皮開肉綻び。鮮血淋漓渾身紅ふ染る。
戴宗は此光景を見て大ふ心を惱ましまでも。更ふ宋江を救ふべき
計あらゞ暗に万千の悲歎を催ぞ。哀れ。宋江初の間は猶胡言
乱語を以て。狂人を詐り做れども。拷問甚ゞ厳あり。遂に
白状して云る。某前日潯陽樓ふ登て大に爛醉し。詩を吟
じ。毛頭別意あらずあり。知府白状を取て。先重さ二十五斤の
頸枷とうけ。乃ち大牢の内ふ入置て。緊〳〵ゝまと守せる。戴宗は
手下の牢守共に命じて。宋江を懇に憐〳〵み。朝夕又自ら酒食を牢
中に送て宋江を款待る。是ふよりゝ〳〵格別艱難の大牢に移まども。
苦〳〵あり〳〵。扨蔡九知府は黄文炳を後堂に邀へ〳〵深〳〵謝〳〵
云る。這次若汝ゞ高見ふあらゞ必定宋江ふ誅るべ。黄文炳ゞ云此
事若延引ふ及ばゞ悪しあん。早々書簡を修へ。使者を京に
宜〳〵尊父大師恩相に告知せまる〳〵せ。相公國家の為ふ大功を建玉
ひ〳〵と。帝へ奏聞あり〳〵め〳〵。高名を天下に振ひ。知府ふ
閑て大ふ悦び。則ち黄文炳ふ謝して云る。我早々書簡を修へ。使者
を都ふ遣し。足下此回の大功。詳に父太師ゞ方へ告知せ。早速天子ゞ

奏閉あるべし。足下に大官大職を授け。互に富貴栄花に隆て。共に祖
と重祐鼎と列ねべし。娛むべし。黄文炳が云某原来一身を門下に倚して
あるべ。万一寸進を得て立身さるとあらば。命を捨力を盡して相公の大
恩を報ずべし。蔡九知府此日一封の書簡を寫して。京に使者を馳んと
て。已に用意を調へしうべ。黄文炳又云相公須く人を撰て。此使者を命じ
ゐへ。知府が云。當地ふ両院の節級戴宗と云ふ能仙術を曉して神行の
法をなす。一日の内に八百里の道を行。只好此者を遣すべし。然らば上下
の往来僅旬日の間あらん。黄文炳これを閲果して如く調法の者あらば。
大ひなる幸と悦びゐる。知府酒宴を設け。黄文炳を欵待。夜も更しゑ。
黄文炳知府の家ふ一宿し。翌日早々回りゐる。扨蔡九知府は多く金銀
珠玉等の禮物を調へ二の籠の内に収め。次の日戴宗を呼で。後堂に召
し。則命じて云。我此回二籠の禮物并に一封の書簡を以て京の家
父蔡太師が方に送つて。來る六月十五日の生辰を賀せんと欲ふ。汝が
為ふ労を辞せず京に登り全く事を調へ返書を携へ回らば我自ら
重く汝を賞すべし。汝彼神行の法あり。京ふ行うべ上下の往来僅十日の
内あるべ。必ず日限を差へぬ。早々急ぎ故郷せよ。戴宗命を受謹
で領義し。乃ち二籠の禮物と一封の書簡とを取て。知府ふ拜別し。
先家に帰て禮物を櫃の内に収め。直ふ牢中に來て。宋江ふまゐ入て云ひ
ゐる。長兄心を安んじゐ。我此次京に上りて幸ひあり。蔡大師の方に
少し計を施し。いうんとも。長兄を救ふべし。我又旬日の内ふは必ず
帰らんと思へば。明日より朝夕の飯食は李逵ふ命じ送らしむべき間
心を寛げ我が回りを待ゐへ。宋江が云賢弟宜しく計を轉らし。我が一

命と救ひ給へ此時戴宗李逵と呼で牢中に至らせ乃語り云るゝ宋長兄醉後誤て反詩を吟じ給ひぬるゆゑ今かく擒とあつて入牢し給ひ我又知府が命と請て東京に上る間其内朝夕飯食は獨汝と頼むなれど必ず怠り給へ宋長兄に事て懇情を盡せ李逵大に怒て云只反詩と吟じ給るのみに何の罪あらん當世謀反と企る輩悉く大官となりて安穏に某斯在上に誰か敢て宋長兄を悩ましまゝ若妖怪ふるゝも宋長兄に仇せん者あらば我平生の大斧と以て一々頭を砕べし戴長兄必ず心を安んじ給へ東京に趣きて某毛頭怠ることなかるべし戴宗別さに臨で又再三李逵に命じて云るゝは賢弟必ず酒を貪て宋長兄の飯食を缺ることなかれ若万一酒に醉て自ら事を誤ち宋長兄にも艱難を請しむることあらば我深く汝と恨むべし李逵が云長兄かゝのごゝ疑ひなば我今日より酒を禁じ且暮牢中に在て宜しく宋長兄事へべし戴宗に別と閉て大に悦で云賢弟よ〳〵あゝ此のごゝ心を留て宋長兄に事へば我全く心を安んじべし仮令も怒を発し爭を惹ことなれとて遂に宋江に別さて牢中を出此日より李逵は酒を断て牢中に在且暮宋江に事へて少も離れず怒勤に務ることを優しくされさて戴宗は宿所に回り旅粧を調へ書簡を便袋に収め自ら籠を荷ひ四の甲馬を双の腿に拴着則ち神行の法を做て咒語を念じ遂に江畔を離て東京へと進発し當日晩に至て旅宿を求め甲馬を取て休息し翌日未明に起て又四の甲馬を両の腿に拴つけ遂に籠を荷て旅宿を出かの神行の術を行て飛ごとくに跑しべ千里を遠しとせざりけり此日もはや紅日西山に傾き夕陽斜かりしべ又旅宿を求めて休息し翌日五更の一天に





戴宗使命を奉て
蔡知府と辭別を

起早涼に乗じ神行とかし。足に信て馳るに。三百餘里を過時己に己
の上剋あり。戴宗少し疲るる色若も清浄の酒店あらば暫く憩ん
と欲し。左右を伺ひしに共更に一座の酒店もあらざりしに。此時六月の
初旬なれば。天氣甚だ熱し。全身汗に濕ひ。殊更堪がたかりしに。戴宗酷
く暑氣に中んとを怕れ。若清き家もあらば暫時休息して暑氣を
も避んに。此所はいつある困窮の地なれば只一軒の酒店もあらぬやと頻り
に憂ひる所に遥なる樹林の側に水に傍湖に臨で一軒の酒店ありしに
戴宗大に悦び恰も電のごとく馳て酒店の前に至りしに乃ち頭を擧此
所を見るに清浄なる座鋪二十余間あり。戴宗大に悦び自ら籠を荷
ひ店の内に入る一間の座に就て籠を卸し衣を脱ぎ則窓の欄杆に靠て暫く休
息しる所に一人の酒保來つて問るに貴客は酒を用ひるか戴宗が



云酒は少し用ん多く與ふとあるを唯急に飯を携へ用ひしやと
酒保がいふに我店に牛肉猪肉羊肉鵞鶏鴨等の有多し。貴客の好に
依てあまたを進らすべし。戴宗云我は只素酒を吃して葷酒を用ひざる別に
野菜あらばあまたを与へよ必ず肉を出すとあらば酒保これを閉て再び
走り出頓て一椀の菜蔬と三碗の酒とを携へ出れば戴宗は飢渇の餘り。
あまたを過半用ひて又飯を求んとせし處に忽ち天旋り地轉り眼花
舌癱て遂に座上に倒るる。此處は則ち梁山泊の下にして此店は是朱貴
が酒肆なり此時朱貴戴宗が蒙汗藥に中て倒るるを見て座上に出來
り乃ち彼小賊両人に命じ籠を收しめ又戴宗が懐中を搜させる處
に一つの便袋を取出し其内を見るに一封の書簡有りと朱貴に与へ來
貴これを接へ封皮の上をとるに幾ばくの文字を書して平安家書吉拜

奉上父親大人膝下。男蔡德章謹封と有れば。朱貴則ち封と披らき
是とる。其内の文句ふいそく
見今拏得應謠言題反詩山東宋江監收在牢。一節聽候
施行とありければ朱貴見了て大ふ驚き。良久しく只惘然と呆
ありけり。両人のふ賊いかゝ戴宗と擡て人と殺と草房の内ふ至り。己て
衣と剝取んとせし處に腰の縧ふ一の鞭露を出しければ朱貴又ふ疑
取く見るに脾の上ふ銀字と雕着ていそく。江刄両院押牢節級戴宗と
ありしぞ。朱貴ふ賊らふ對しいそく。汝先手と動とてありれ我常に軍
師呉先生の語りるふと聞るに。江州の神行太保戴宗と云人。軍師と
交厚き旧友なりとへ。恐らくは此人ゆゝぞ有べし。然まども此人いうんぞ
此書簡と京に送つゝ。宋押司と害せんとすゝや。遮莫天幸ひと賜ゝ

此書簡我手に落ゆる上ハ。宋押司の一命先恙なかるべし。宜しく解
藥と以て彼と甦せ。乃ち事の實否と詳ふ問んとて。頓く小賊ふ解
藥と調合させ。戴宗が口中に灌入れば。須臾の間ふ戴宗再び眉を
揚眼と開ひくわ起。乃ち朱貴が手に彼書簡と披き拿ゆるとく
て。大ひふ呼て云。汝ハ誰なるぞ。斯大膽に蒙汗藥と用ひ我と顛
倒させ。剩へ蔡太師が方へ呈する書簡と擅に封と破りしこと罪ま
さに死ふいるべし。朱貴大ひふ冷笑て云。蔡太師が方へ送る書簡を
開きゆるとも。何の利害うあらん。我此處ふハ英雄豪傑充滿て。當朝の
大宗皇帝の對手ふもあらんと欲す。豈肯て其餘の人と恐まんや。戴
宗此言と聞て大ふ驚き。乃ち問く云るゝ足下ハ好き一人の豪傑と
覚へるゝ。願くハ姓名と知らゝやゝ。朱貴が云我ハ此所に居住し。專ら世

間の善悪を窺知る。山陳に註進とあり。梁山泊の豪傑早地忽律朱貴と云者、戴宗が云足下果して梁山泊の豪傑あらん吳学究先生と知りうるふや。朱貴が云吳学究へ乃是我山陳の軍師と成て。兵権と掌る。足下いかんぞ吳学究と問ふふや。戴宗が云吳先生と某とへ交り厚き知己へ。朱貴が云吳先生も常に足下の噂あり。足下へ延定江州の節級神行太保戴院長あらん。戴宗が云某則其両院押牢節級戴宗へ朱貴が云向に山東の及時雨宋公明江州に流されし時。我山陳に至て。諸の豪傑と叅會ありしに。其節軍師吳学究一封の書簡を足下に寄て。宋公明のことを頼まるに足下何由ぞ今却て宋押司を害せんと欲ふや。戴宗が云宋押司と我とへ今同胞の兄弟よりも猶親し。彼今誤て反詩を吟じ居る故遂に擒とあつく入牢せり。我彼を救ふとすれ

ども。計を行ふべきのみ。是に依て我今京に上り何ぞ方便を盡。宋公明を救ふと欲せば我豈敢て彼が性命を害せんや。朱貴がいふく。足下猶詐りなるべし。此書簡を見よと乃蔡九知府が書簡を戴宗に見せ。しかれば戴宗これを見て忽然として大に驚き。即ち宋江が始て江州に至りし時の次第。吳学究の書簡を得たること。此度宋江潯陽樓の上にて。醉後反詩を吟じたる始末まで。一々詳に語りしかば朱貴是を聞て云へ。此上は院長自ら山陳に上り諸の頭領と共に良計と高議して。宋公明の姓命を救ひ奉るべし。先酒食を具へて戴宗を管待頻て芦葦の内へ響矢を射入れしかば。小賊ら相図の響と聞。即ち一艘の快舟を漕ぎ朱貴が亭下に至り。朱貴遂に戴宗と共に舟に乗直に金沙灘に至て岸に上り。朱貴自ら戴宗を導て。陳前に

至りしかば呉用は戴宗が消息と聞くに忙しく関前に出て相迎へ互に禮を行ひて呉用先戴宗に對して云ふ今日は何の風院長を吹て此所に至らしめたるや先大陣の内に入まひて諸の頭領に相見へんと て遂に院長を引て陣中に入則ち諸の頭領と請ぜ戴宗に遇しも各座已に定りたる處に朱貴頓て宋公明が反詩を吟じ今牢中に在と戴宗が京に上らんとして此處を通りし來歴詳に語り聞たまへば晁蓋其外大に驚き猶戴宗に問尋ね戴宗有し次第備細に語るに晁蓋已かくあらば諸の頭領を請て人馬を催さしめ急に江州を攻宋江を救はんと押司が命は今風前の燈のごとくにあらんと議したまへ軍師呉用られと諫て云此事不可あり いかんぞなれば此所より江州へ路甚遠し若人馬を起して江州へ攻行へば此事さや江州にもれ聞へ宋公明の姓命は忽ち知府が手に害せらるべし此事力と以て敵すべからず唯智を以て対すべし某不才なりと雖ども一の計あり唯戴院長の身の上に依て宋押司を救ふべし晁蓋が云願くは軍師の良策を閃へ呉学究が云今蔡九知府戴院長を京へ遣しし書簡を蔡太師に送て返簡を求んと欲せば是則ち我輩が計を行ふべき本なり先宜しく蔡太師が返簡を假て一封の書札を作へ乃ち其文に云遣すべきは罪人宋江なりと必ず其地に於て罪を行ふとあらば唯急に彼を京に送るべし然らば此地に於て罪を委細に拷問し宜しく決斷を遂へ斬罪に行ひ即ち首を梟して衆に示し速に童子らが謠言を絶すべしと誑らば蔡九知府必ずこれを信じて宋公明を都に送ることあらん然らば官軍等宋押司を監押して我が山の下を過ん我輩預かり先人を山下に馳て宋公明を奪取しめん此謀計いかん

晁蓋が云軍師の計最善へ但万一此所を過らずんば又却て大変を誤
ることあらん公孫勝が云ふ事何ぞ難きことせん我が輩預じめ先人を遠
近に馳て其過る道を窺へば何ぞ路ふ〳〵あらんも是非々々宋押司
を奪ひ取んに何の難きことあらん晁蓋が云賢弟等の計策極て當
りて大に悦びぬ此段事長くなれば次巻ふ推てそうて見べし

新編水滸畫傳卷之三十六　畢

清雲佛書
國学研究書屋所
彩書古本備後所三休橋西
大場孫兵衛